科目区分: 専門科目，授業科目名：政治学Ⅰ

政治情勢の変動と社会への意識

社会科教育講座・岡村　茂

1.　政治学関連科目の目的と目標

政治は実際に興味を持って見つめているとそれほど難解なものでもない。政治制度のルール（法制）と慣行へのある程度の知識があれば、国会議員があれこれ動いていても、ああ、こういう事かと推定する事ができる。しかし、最近はこうした生活知の自然な結果としての政治的な判断力なるものがやや心もとなくなってきている。その点を授業では意識し、また、種々の場面で学生諸君との対話の機会を増やし、教員の視点からも検討を行ってきた。本報告は途中経過のレポートである。

政治学はⅠからⅢまでの編成となっており、新課程の社会情報論、国際情報政治論などとペアをなして、社会科学系専門科目の一翼を担っている。もちろん、社会科教育講座の所属学生は教職や教育関連業種へ、情報教育コースでは、情報関係の諸企業などへの基礎的な職業人としての知識とノウハウを授ける場となっている。

2.　まず、本講義の存在意義であるが、シラバスのチェック体制の中で、次のごとくその叙述を整備しつつあり、また、実態もその通りである。

まず、学問的にもきわめて難解な「政治とは何か？」という原理的な問題には、深入りしないようにしている。授業概要では大略以下のごとく整理した（行論の関係上一部改変）。

「政治とは何かという事を改めて聞かれると大変答えにくい。政治状況が混迷の様相を呈しているだけになおさらである。政治というものを、社会全体の管理を、誰が、どのように行っているかの問題だと一応は押さえたうえで、抽象論に見切りをつけて、むしろ具体的な政治情勢の豊富な知識を養うことに専念した方が実り多いのではないか。刻々に変動する内外の政治情勢を読みとる努力を通じて、始めて、政治とは何か、それはいかにあるべきかという市民社会の根幹にかかわる問題に共通の回答をうることが出来る。本講義ではそうした生きた政治を一市民としてダイナミックにとらえる基礎的素養を養うことを眼目としている。変転してやまない政治を学生諸君が自らのものとしてとらえ、その政治的所信を開放的に開陳できるような新しい市民像をともに探求したい。」

以上のごとく、実用主義的にそこにあるものとしての「政治状況」を措定している。もちろん、厳密な思索によれば、事は順番が逆であり、実は物質的諸関係の虚像を我々は政治的な力関係のあれこれに意識の上に翻訳・転写しているのだが、政治的事象への慣れと接し方の量の問題が一般的に言って受講する側にあるだけに、分かりやすいアプローチをとっている。

具体的な本講座の目標に関しては、以下のごとく叙述を整備した。

(1) 政治社会理解の為の基礎的素養を養う。

(2) 毎日接する政治的な事象に敏感に反応し、生きた政治を市民としてダイナミックにとらえる。

(3) 変転してやまない政治を学生諸君が自らのものとしてとらえる。

(4) 政治的所信を開放的に開陳できるような新しい市民像を探求する。

以上、要するに「アクティブな市民像」という理念・理想への知的な旅の始まりである。もちろん、何でも機械的に反対を唱える急進的なはぐれ者［非生産的だ］でもなく、また、上意下達に唯々諾々と従い、繁文縟礼を墨守しその果てに硬直化して時代の変化に付いてゆけなくなる前近代性護持の姿勢などでもない。自主的に考え、自主的に建設的意見と実行力を備えた人格像をという目標設定である。

3.　政治学的思索の涵養は膨大な人類の知恵の結晶について太い線においてその概括を把握する事から始まるであろう。それには、国家と国際社会との近代的な形成史を政治学あるいは国際政治学の観点から抑える必要がある。

そうした観点から、本講座の前半では、ウエストファリア一体制から現代の国連にいたるまで、一貫して国際社会の原則として維持されている西欧国際政治システムの基本的な内容を、時々の政治情勢の特徴をある程度詳しく折

り込みつつ分析した。つぎに、19世紀以降に於ける近代西欧の国際関係を中心に概観しつつ、日本が開国し、近代化に乗りだしたその一般的な理由と日本的な近代化コースの特殊性とをあわせて考察した。

また、授業の特色として現代の出来事への関心を不断に喚起するようにトピックスを拾うように心がけ、情報化時代とも呼ばれる現代世界の特徴をどのように把握すべきかを学んでゆくこととした。また、講義内容は歴史的問題を扱う場合でも常に現代の具体的な政治状況を念頭におきつつ、理解しやすいように進めていきたいと、常に考えている。大状況の理論的な把握と実際的な時事的知識との往還である。そのため新聞、ネット情報などを用いた現状分析の素材も適宜織り込んでいった。国際政治と当然わが国の政治状況についてもふれていった［ますます両者は区別し難くなっている］。

4. 大学での勉強は高等学校までの科目とは異なる編成になっている。その点、1回生中心のクラスであるので、大学生活を如何に主体的に自分自身の成長のために把握してゆくべきかなど、大学での修学にかかわる話題を展開する必要を感じた。大学課程の社会科学は政治学や経済学や法律学などといった区分で専攻が分けられ、かつ授業が構成されている。高等学校で学んだ社会科の諸科目と上記の専門科目はどのように具体的に再編成されるべきだろうか。高大の連節がうまくいっているのかどうか、この点にもより多くの関心を寄せるべきだ。

現代の大学生の知的解体状態が強く懸念されている。教員の側が研究にのみ関心があるものとして、学生の自主性を涵養する事を軽視するならば、きわめて遺憾な結果を生む事は明らかであろう。その点、授業評価調査とは別に任意に調べた結果（社会情報論の授業、受講生23名）は驚くべきものだった。紙媒体の新聞記事を読んでいるものはゼロ、ネットで新聞社の詳報に接しているものもゼロ、テレビの主要ニュースショウのいずれかを視聴しているものもゼロだった。ここには、国語力の低下をベースに、PISA型の社会的読解力が地に墮ちているさまが実感された。日常の三大ニュースソースについてはそれ以来異なる授業でも複数回に渡って強調するようにした。

5. 対話の習熟度はまた別の問題を投げ掛ける。安定した時代の過保護の産物なのであろうが、自己の所信を簡潔に述べる事が苦手な学生が多い。教員の側からの授業中の質疑は、学生にはいやなものらしいが、敢えて続けるようにしている。漫然と授業中の板書を写せばそれでよいという気風が蔓延しているからだ。特に理由付けにおいて論述する訓練がその威力を発揮する。以上述べた事は明らかであるとして、その理由を端的に述べればどのようなものかという口頭の質問を常に用意するようにしている。単調な授業に流れる事への歯止めである。

6. 政治学Ｉへの学生評価は幸いにも良いスコアであった。この授業を評価すれば、10点満点で何点ですか、との問い掛けに、9は3名、8.5は1名、8は6名、7は4名であった。

以下感想を拾っておこう（一部表現を簡略化）。「この授業で印象に残った点は何ですか」という質問に対しては、「…政治の見方、考え方というものはこういうものであるかと感心し、考えさせられた」「これから自分が大学でするべきことが何なのか改めて認識できた」「政治の方針と社会の動きは相互に関係していることがよく分かりました」「以前「小沢氏の辞任騒ぎはなんだったのか」というテーマでレポートを書く課題が出ましたが、この課題がなければこの点について積極的に調べる事も無かったと思うので、いい機会になりました」「日本史が好きなので、日本についての内容をやってくださった時は嬉しかった」「黒板にきっちり書いていく先生は少ないので、ノート取るのは大変だったけど有り難かった」「細かく説明、板書していただけるので分かりやすかった」「新聞を読め！と言われた点、資料（新聞記事など）を多く配布された点［が印象に残る］」云々である。

改善すべき点は、以下の通りであった。

「授業内容が難しかった」「要点をもう少しまとめて欲しい」「声が聞き取りにくかった」「静かな教場でやってほしい［工事の騒音のただ中だったので］」「なるべく字を崩さずに書いてください」等である。早書きなので、字が流れている点は閉口した向きもあったようである。ただ、学生諸君ももっと前に詰めて座ってみてはいかがだろうか？　天狗参上の剣術ではないが壁を背にしたがる向きが多い。

なお、評価する印象の項目に書いてはいるが、次のようなニュアンスのこもった回答もあった。「［印象として］歴史を改めて学修する事が出来たが、まだ自分はこの授業のレベルに達していないと感じた。」この記述はカルチャーショックとして授業が作用することも示唆している。前向きの効用を願うものである。